

メリーさんの羊

別役実戯曲集



メリーさんの羊

別役実戯曲集

三一書房

メリーさんの羊

Printed in Japan

1984年11月15日 第1版第1刷発行

著 者 別 役 実  
© 1984年  
発 行 者 菊 地 喜 三 次  
印 刷 所 誠 和 印 刷 株 式 有 限 公 司  
製 本 所 東 京 美 術 紙 工  
発 行 所 株 式 有 限 公 司 三 一 書 房

東京都千代田区神田駿河台2の9  
電 話 03 (291) 3 1 3 1—5 番  
振 替 東 京 9-8 4 1 6 0 番  
郵便番号 1 0 1

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

メリーさんの羊

別役実戯曲集



メリーさんの羊——目次

|             |     |
|-------------|-----|
| 眠っちゃいけない子守歌 | 5   |
| 星の時間        | 43  |
| メリーさんの羊     | 89  |
| 街角の事件       | 129 |
| あとがき        | 215 |

装幀・石井  
強司

眠  
っ  
ち  
ゃ  
い  
け  
な  
い  
子  
守  
歌

登場人物

男 1  
女 1

古びたテーブルと、椅子が三つ。テーブルの上には灰皿と花びん。花びんには枯れかかった花が一輪。奥に、これも古びた茶ダンス。電話とカセットテープレコーダー。テーブルの上に、天井から裸電球。

女1が、カバンと魔法びんを持って現われる。手に、小さな紙切れを持っている。

女1 ごめん下さい。ごめん下さい……。誰もいないんですか……。？ おかしいわね。(カバンを置いて)ここじゃないのかしら……。？ (手に持った紙切れを見る)エレベーターをおりて、左へ十三番目の部屋をノック……。ノックはしなかったけど、開いてたんだからそれはしょうがないわ……。ごめん下さい……。やっぱり、ノックした方がいいのかしら……。。(と、外へ出て行きかけて)これ、ここに置いとくの、変ね……。。(と、床に置いたカバンを手にとる)

男1、ぼんやり現われる。

男1 誰だい……？

女1 (とっさにカバンを背中に隠して) どうも、失礼しました……。

男1 (カバンに気付いて) 何だい、それは？

女1 いえ、違うんですよ。これは何でもありません。今、うっかりしてノックをしないで入ってき  
てしまったもんですからね、ノックをするために出ていこうとして、これ、ここに置いてあったこ  
とに気付いたもんですから、ノックする前にこれだけここに入っているのは変かもしれないと思  
まして……。ですから、私のなんです、これは。あなたは、あなたのだと思いいったんですか、  
これ……？

男1 そうじゃないよ。(椅子に腰をおろしながら)ただ、お前さんが今、それを隠したからね……。

女1 隠したんじゃないかもしれませんよ。これをこういう風にしたのは、もしかしたらあなたがあなたのも  
のだと思うかもしれないと思ひまして、そうじゃないってことをお知らせしたかっただけなんです。  
だって、本当なんですからね、これが私のものだということは。何ならこの中に何が入っている  
か、私ソラで言ってみせてもいいですよ。その後であなたが、本当にその通りかどうか調べてみて  
下さればいいんです。

男1 わかったよ。もういいから静かにしてくれ。それでなくなつて、私は死にそうなんだから  
……。

女1 まあ、死にそうなんですか……？

男1 そうだよ。見ればわかるだろう。ゆうべからね、どうも生きてるみたいな気がしないんだ……。  
もちろん、息もしてるし、脈もあるし、こうやって見てみると(あたりを見まわして)いろいろ見え  
ることは見えるんだけどね……。

女1 (やや疑わしそうに) じゃあ、やつぱり生きてるんじゃないやありません……？ 私にはそう見えませんが……。

男1 そりゃあ、生きちゃいるんだろうけどさ……。そうじゃなくちゃ、お前さんと今こうして話しているはずがないんだし……。え……。今、私はお前さんと話をしているかい……？

女1 話してますよ。ですから、大丈夫です。だって、話してないみたいなんですか……？

男1 いやいや、どうもね、話しているんじゃないかとは思ってたんだ……。ところで、お前さんは何だい、トシコかい……？

女1 いいえ、そうじゃありません。お話しましたでしょう。今、お訪ねしたところなんです。(カバンを置く) 電話をいただきましたましてね……。 (ふと不安になって) でも、あなたじゃないんですか、私どもに電話を下さったのは……。一時間ほど話し相手が欲しいとかで……？

男1 ああ、それか、お前さんは……？

女1 そうです。会から派遣されましたあなたのための話し相手です……。 (カバンを開いて) もちろん、本も何冊かお持ちしましたからね、お気に入りものがありましたら、お読みしてもいいんですが……。

男1 私は話をしたいだけだよ。だいたい長いこと話をしてみなかったからね。つまり、私が話して、答えてくれる奴とさ……。

女1 わかりました。じゃあ、そうしましょう。(カバンからエプロンを出して) でもその前に、このあ

たりをちょっと片づけさせて下さいね。そうすればきっと、話はずむでしょうから……。

男1 何を片づけるんだい……？

女1 ですから、このあたりをざっと……。

男1 いいよ、そんなことしなくても。私がしたいのは、話すことなんだからね。私がここに坐つて、お前さんがそこに坐つて、お前さんが何か言つて、私が何か言つて、それで、おかしかったら笑うとかさ……。わかるだろう……。

女1 わかりますけどね……。〔不満そうにあたりを点検しながら〕お掃除をするのも、私どものサービスの内なんですよ。それだけじゃなく、お望みなら、お洗濯もしますし、お料理をこさえることもするんです……。あなた、お夕食はもうお済みなんですか？

男1 私は夕食は食べないんだ……。

女1 あら、それはいけませんわ。それじゃこうしましょうか。私、そのための材料もいくらか持つてきておりますから、〔カバンを探つて〕これで何か簡単なものをお作りして、お食事をしながらお話しをするということに……？

男1 そんなことをしている時間はないんだよ、私には。

女1 どうしたんですか、いったい……？

男1 いいから。ともかくそこに坐つて、何か話してみてくれ……。

女1 そりゃあ、まあ、そのために来たんですからそうしますけどね……。〔テーブルに向い合つて坐

りでも、いくら話し相手として来たって言いましても、いきなり面と向ってさあ話せて、そういうあれじゃないんですよ、私たち……。あれこれ仕事をしながら、それでどうしたんですかって、そういう風に話すんです……。

男1 私がどれほど長い間、話しをしなかったか、知ってるかね……？

女1 どなたもいらっしやらないんですか、御近所に……？

男1 いないよ……。

女1 でも、それじゃトシコさんていうのはどなたです……？

男1 トシコ……？

女1 だってあなた、さっき私を見てそう言ったんですよ、トシコかいって……。

男1 ああ、だからそうなんだよ、お前さんのことをトシコかなって思ったんだ……。

女1 ですから、そのトシコさんていうのは誰なんです……？

男1 トシコ……？ お前さんはトシコじゃないんだろう……？

女1 違いますよ……。

男1 じゃあ、誰でもないんだトシコってのは……。

女1 でも、それじゃ何故、私を見てトシコかい、なんて聞いたんです？

男1 だって、それはしょうがないじゃないか、トシコかなって思っちゃったんだから……。

女1 ですけどね、私を見てトシコかなって思ったんだとすればですよ……。

男1 ちょっと待ってくれ、これが話かい？

女1 何ですか……？

男1 だからさ、もう話は始まっているんだね……？

女1 ええ、でもこれは違うんですよ。たださっきその名前が出てきたもんですからね、ちょっとおうかがいしてみただけです。別の話をしましょうか。とりあえずお茶でもいれて……。

男1 いやいや、私の方はちっとも構わないんだ、いいじゃないか、その話で。その話を続けよう、トシコについて……。

女1 だって、それはそれだけのことなんですから……。もしかしたらあなたの身内の方なのかなって思っただけです。（立ち上って）お茶にしましょう。それは構いませんでしょう？ この中に紅茶が入ってるんです。お話ししながら用意出来ますし。ミルク紅茶ですよ。私どものサービスでしょ。ティーカップは、あの中ですか……？

男1 そうだよ。つまり、話は続いているんだね……？

女1 もちろん、その通りです……。こんな風に、何か簡単な仕事をしながら話すのが、お話しをするためのコツなんです……。〔茶ダンスの中を探して〕ここにあるの、お借りしていいんですか……？

男1 いいよ……。で、その……。トシコのことなだけだね……。

女1 やめません、その話は？

男1 何故……？

女1 何故って……。まあ、いいですけど……。(抽出しを開けて) スプーンは、ここですね……。

男1 どんな奴なんだい……？

女1 何ですか……？

男1 だからさ、そのトシコって女は……。女なんだろう、トシコっていうくらいだから……？

女1 女です……。と、思いますけど……。でも、私は知らないんですよ……。

男1 知らないのかい……？

女1 だって、知るわけないじゃないですか。あなたが言い出したんですからね、トシコって名前

は。(テーブルの上に、ティーカップなどをセットする) 私のことを間違えてそう呼んだんです……。

男1 でも、いいかい、もし私が間違えたんだとしても、トシコって女が、現にどこかにいなくち

や、間違えるはずなんかないだろう？

女1 そうですよ……。

男1 だから、それはどこにいる誰なんだいって、私は聞いてるんじゃないか。

女1 ですからね、私は知らないんです。よく聞いて下さいよ。何度も言うようですが、トシコって

いうのは、あなたが言い出したんですから。

男1 私は、お前さんがそうだと思って言っただけ……。

女1 そうですけどね……。 (あきらめて) もうやめましょう、これは……。あなた、こんな風な話を

したいんですか……？

男1 別にそうじゃないけどね……。私は、話なら何でもいいんだ……。

女1 それなら、何かほかの話にしましょう……。〈魔法びんからカップにお茶をいれる〉お茶でもいた  
だきながら……。

男1 結構、面白かったじゃないか……。

女1 〈カバンから角砂糖を出して〉私は駄目なんです。そういう、論理的な話は……。ですからね、あ  
の時刻を食べておいしかったとか……。何をして楽しかったとか……。そういう……。〈角砂糖をつ  
まんで〉いれますか、お砂糖……？

男1 うん……。

女1 〈ひとついれる〉もうひとつですか……？

男1 うん……。

女1 〈いれる〉もうひとつ……？

男1 うん……。

女1 〈いれる〉もっと……？

男1 うん……。

女1 〈いれようとしてやめ〉だって、いれすぎじゃありません？

男1 それ、角砂糖かい……？